

成人看護実習におけるケース・スタディの教育効果

柳沢節子, 山崎章恵, 百瀬由美子

小林千世, 小松万喜子

A Study on the educational effect of the case study in Adult Nursing Practice

We have adopted the case study in Adult Nursing Practice.

The purpose of this study was to examine the educational effect of the case study.

Results were as follows :

1. Students had case studies of internal nursing and surgery nursing respectively. They selected themes according to faculties' characteristics, independently.
2. Students and teachers valued the case study by the same chart of evaluation. Students and teachers gained more than 3 average points of the chart of evaluation.
3. Students evaluated the second case study more highly than the first.
4. The attitudes of learning of the students agreed with the object of the case study.

Key Words :

case study (ケース・スタディ), Adult Nursing Practice (成人看護実習), educational effect (教育効果), a chart of evaluation (評価表)

はじめに

看護教育において臨床実習の果たす意義は大きく、教育効果をあげるための実習教育の方法が模索されている。ケース・スタディを看護研究の教育を目的としてとりいれている報告は多い¹⁻⁵⁾。本校では受持事例の援助過程

を振り返ることにより患者理解を深め、また問題解決能力を養う目的で、成人看護実習の展開にケース・スタディをとりいれている。

今回はこのケース・スタディの実施状況および達成度を明らかにすることにより教育効果と今後の課題を検討した。

成人看護実習およびケース・スタディの展開

1. 成人看護実習の展開

成人看護実習の目的は「成人期にある対象を理解し、あらゆる健康段階、健康障害の内容に応じた看護を実践する能力を養う」であり、ケース・スタディを行っているのは単元「成人看護実習Ⅰ（以下内科系実習とする）」と「成人看護実習Ⅲ（以下外科系実習とする）」である。実習展開については以下の通りである。

(1)内科系実習

目的：慢性疾患をもつ対象を総合的に理解し、健康レベルに応じた看護を実践する能力を修得する。

展開：5病棟使用し、学生は1病棟3～6名で4週間の臨床実習を行い、1名の患者を受け持つ。状況により複数の患者を受け持つ。教官は3名で、それぞれ1～2病棟を担当する。

(2)外科系実習

目的：手術を受ける成人期の患者の看護を実践する能力を修得する。

展開：5病棟使用し、学生は1病棟3～7名で4週間の臨床実習を行い、1名の周手術期の患者を受け持つ。状況により複数の患者を受け持つ。教官は3名で、それぞれ1～2病棟を担当する。

2. ケース・スタディの展開

ケース・スタディの目的・目標、実際の実施と評価方法については以下の通りである。

(1)目的

①ケース・スタディ・レポート（以下ケース・レポートとする）をまとめることにより、患者を総合的にとらえ、看護過程を系統だてて整理し、理論と事実の結びつきを理解する。

また、問題を適切に解決する能力を養う。

②事例をグループで検討することにより、各自の体験したことを共有するとともに、学びを明確にし深める。

③看護に必要な研究的態度や習慣を身につける。

(2)目標

①患者を総合的にとらえ、問題点を明確にできる。

②理論的根拠のもとに看護を実施できる。

③実施した看護を評価・考察し、今後の看護に役立てることができる。

④文献の活用ができる。

⑤ケース・レポートとしてまとめ、発表ができる。

(3)展開

①オリエンテーション

4月のガイダンスの際に実習要項と「ケース・スタディの手引き」を配布し、目的と方法の概略を説明する。

②すすめ方の実際（表1）

臨床実習を行いながら、受持患者の看護問題などからケース・スタディのテーマをとりあげる。最終週には各自が作成したケース・レポートをもとに、実習グループごとに事例検討会を行う。

(4)評価

実習終了時に学生は表2に示したケース・スタディの評価表に基づき、5段階（できない1～できた5）で自己評価を行う。また、ケース・スタディを行って「学んだこと」「困ったこと」などを自由記載し提出する。教官は教官評価欄に評価点を記載する。

研究方法

1. 対象

平成5年度および6年度に内科系実習、外

表1 ケース・スタディのすすめ方

臨床実習	曜日	ケース・スタディの展開
第1週目		受け持ちケースの看護問題を明確化する。
第2週目	金	テーマを選定し、計画書（動機、目的、方法、文献）を提出。教官から助言を受ける。
第3週目	火 ↓ 金	援助計画に基づき、看護を展開する。 ケース・レポート下書きを提出し、助言を受け修正を加える。
第4週目	木 or 金	事例検討会の前日までに、B4用紙4枚以内に清書してケース・レポートを提出する。 事例検討会

表2 ケース・スタディ評価表

評価項目	〈自己評価〉 できたーできない	教官 評価
1 自ら学びたい視点で、テーマを選定できた	5・4・3・2・1	
2 テーマ；スタディの内容を明確・簡潔に表現できた	5・4・3・2・1	
3 はじめに；動機、目的が明確にできた	5・4・3・2・1	
4 患者紹介；患者理解に必要な情報が紹介できた	5・4・3・2・1	
5 看護経過；看護の実施経過が具体的でわかりやすく記述できた	5・4・3・2・1	
6 評価；結果に基づき看護過程全体を評価できた	5・4・3・2・1	
7 考察；「はじめに」で明らかにした目的に沿って考察できた	5・4・3・2・1	
8 まとめ；考察で得られた重要な点を整理し、看護の本質に近づくことができた	5・4・3・2・1	
9 おわりに；今回のスタディの限界と今後の学習課題が表現できた	5・4・3・2・1	
10 スタディの見通しを立て、計画的に実施できた	5・4・3・2・1	
11 スタディについて自ら学ぶ姿勢を持ち積極的に取り組めた	5・4・3・2・1	
12 スタディを行うことにより患者を総合的にとらえ、看護過程を系統だてて整理でき、理論と事実の結びつきが理解できた	5・4・3・2・1	

科系実習を履修した学生156名。ケース・レポート数261。

2. 方法

(1)ケース・レポートからテーマ、ケースの疾患・性別・年齢について分析を行った。

(2)ケース・スタディの評価表から、教官による評価（以下教官評価とする）と学生の自

己評価（以下学生評価とする）の得点について分析を行った。

(3)評価表の自由記載欄の「ケース・スタディを行って学んだこと」「ケース・スタディを行って困ったこと・大変だったこと」について、意味のある文節を抽出しKJ法により内容の分析を行った。

表3 ケースの年齢

(%)

年齢 \ 実習科	内科系	外科系	合計
20歳代	2 (1.9)	3 (1.9)	5 (1.9)
30歳代	3 (2.9)	1 (0.6)	4 (1.5)
40歳代	16 (15.2)	22 (14.0)	38 (14.5)
50歳代	21 (20.0)	24 (15.3)	45 (17.2)
60歳代	36 (34.3)	55 (35.0)	91 (34.7)
70歳代	22 (20.9)	39 (24.9)	61 (23.3)
80歳代	5 (4.8)	13 (8.3)	18 (6.9)
合計	105 (100.0)	157 (100.0)	262 (100.0)

(複数患者を1レポートにまとめたものを含む)

結果

1. ケース・スタディ

(1) ケースの性別および年齢

ケース・スタディでとりあげられたケースの性別は男性135名(51.5%)、女性127名(48.5%)であった。ケースの年齢は表3に示す通りで、60歳代が91名(34.7%)と最も多く、70歳以上は79名(30.2%)で、高齢者の占める割合が多かった。内科系実習と外科系実習では各年代の割合に有意差はみられなかった。

(2) ケースのテーマおよび疾患

ケース・スタディにとりあげられたテーマを分類した結果を表4に示した。多かったテーマは、教育指導41件、不安40件、安楽の変調39件などであった。

ケースの疾患およびテーマの分類について内科系実習を表5、外科系実習を表6に示した。内科系でスタディが行われた疾患は、脳・神経疾患26例、呼吸器疾患15例、血液・リンパ系疾患12例の順に多かった。テーマでは、「教育指導」26例、「ADLの拡大」17例、「精神・心理」15例をとりあげるものが多かった。

疾患とテーマの関係をみると、特徴的なものは脳・神経疾患で「ADLの拡大」「精神・心理」が多く、内分泌疾患では「教育指導」が多くとりあげられていた。

外科系実習では、消化器疾患51例、膵・胆・肝疾患43例で6割を占めていた。疾患とテーマの関係をみると、女性生殖器疾患では「不安」、乳房疾患では「リハビリテーション」が

表4 テーマ分類

テーマ分類	件数
教育指導	41
不安	40
安楽の変調	39
精神・心理	28
合併症	25
気道クリアランス	23
ADL拡大	17
早期離床	13
リハビリテーション	13
セルフケア不足	8
その他	10
合計	257

表5 ケースの疾患およびテーマ分類 (内科系)

N = 101

疾患 \ テーマ	教育指導	ADL拡大	精神心理	安楽の変調	セルフケア不足	リハビリテーション	不安	合併症	その他	合計
脳・神経	3	10	7	0	0	4	0	0	2	26
呼吸器	4	1	0	2	4	2	0	0	2	15
血液・リンパ	3	1	1	1	1	1	1	3	0	12
膵・胆・肝	3	1	2	3	1	0	1	0	0	11
循環・脈管	3	2	2	0	0	1	0	0	0	8
内分泌	7	0	0	0	0	0	1	0	0	8
女性生殖器	0	0	2	2	0	0	0	0	0	4
消化器	0	0	0	2	1	0	1	0	0	4
腎・泌尿器	2	1	0	1	0	0	0	0	0	4
乳房	0	0	0	0	1	0	1	0	1	3
その他	1	1	1	1	0	0	1	0	1	6
合計	26	17	15	12	8	8	6	3	6	101

表6 ケースの疾患およびテーマ分類 (外科系)

N = 156

疾患 \ テーマ	不安	安楽の変調	気道クリアランス	合併症	疼痛	教育指導	精神心理	早期離床	リハビリテーション	その他	合計
消化器	5	11	9	7	6	9	5	5	0	0	51
膵・胆・肝	12	8	6	8	5	4	1	3	0	1	43
女性生殖器	8	2	1	1	2	0	1	0	0	1	14
循環・脈管	1	1	1	5	0	2	0	3	0	0	13
呼吸器	3	3	5	0	3	0	0	0	0	0	11
乳房	0	1	0	0	1	0	3	2	5	0	11
皮膚	0	1	0	0	0	0	3	0	0	2	6
内分泌	4	0	0	1	0	0	0	0	0	0	5
その他	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2
合計	34	27	23	22	17	15	13	13	5	4	156

多くとりあげられていた。

2. ケース・スタディの評価

(1) 教官評価および学生評価 (表7)

① 教官評価

平均得点が最も高かったのは「テーマの主体的選択」 4.1 ± 0.9 であった。次に得点が高かった項目は「動機・目的の明確化」 3.6 ± 0.7 、「必要な情報の記載 (患者紹介)」 3.6 ± 0.6 の順であった。一方、得点が低かった項目は「要点のまとめ」 3.1 ± 0.8 、「今後の課題の明確化」 3.1 ± 0.8 、「スタディの計画的実施」 3.1 ± 0.9 であった。

② 学生評価

平均得点が高かった項目は「テーマの主体的選択」 4.1 ± 1.0 、「必要な情報の記載」 3.8 ± 0.8 、「動機・目的の明確化」 3.6 ± 0.9 、「積極的にとりくむ姿勢」 3.6 ± 0.9 であった。得点

が低かった項目は「結果に基づいた評価」 3.0 ± 0.9 、「要点のまとめ」 3.0 ± 1.0 で、特にスタディの計画的実施については 2.8 ± 1.1 と低値を示した。

③ 教官評価と学生評価の比較

得点が高かった項目と低かった項目についての教官と学生の評価傾向はほぼ一致していた。教官評価に比べ学生評価が有意に高かった項目は「必要な情報の記載」「積極的に取り組む姿勢」($p < 0.05$)であった。教官評価が学生評価に比べて有意に高かったものは6項目あり、特に得点差が大きかった項目は「わかりやすい経過の記載」「結果に基づいた評価」「スタディの計画的実施」($p < 0.001$)であった。

表7 ケース・スタディの評価項目別平均得点

N = 261

評価項目	平均得点	教官評価		学生評価		t 値
		平均得点	標準偏差	平均得点	標準偏差	
テーマの主体的選択		4.1 ± 0.9		4.1 ± 1.0		0.6
テーマの明確な表現		3.3 ± 0.8		3.2 ± 0.9		2.4*
動機・目的の明確化		3.6 ± 0.7		3.6 ± 0.9		1.3
必要な情報の記載		3.6 ± 0.6		3.8 ± 0.8		3.3**
わかりやすい経過の記載		3.4 ± 0.7		3.1 ± 0.9		4.4***
結果に基づいた評価		3.2 ± 0.7		3.0 ± 0.9		3.9***
目的に対応した考察		3.3 ± 0.7		3.2 ± 1.0		3.2**
要点のまとめ		3.1 ± 0.8		3.0 ± 1.0		2.4*
今後の課題の明確化		3.1 ± 0.8		3.1 ± 1.0		0.5
スタディの計画的実施		3.1 ± 0.9		2.8 ± 1.1		5.9***
積極的に取り組む姿勢		3.4 ± 0.8		3.6 ± 0.9		3.2**
理論と事実の結びつきの理解		3.3 ± 0.7		3.4 ± 0.8		1.0
合計		40.9 ± 5.9		39.9 ± 6.8		2.7**

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

表 8 経験回数による評価項目別平均得点の比較（学生評価）

有効回答N=102

評価項目	経験回数		1回目		2回目		t 値
	平均得点	標準偏差	平均得点	標準偏差	平均得点	標準偏差	
テーマの主體的選択	4.0	± 1.0	4.3	± 0.9	4.3	± 0.9	2.0*
テーマの明確な表現	3.2	± 0.9	3.2	± 0.9	3.2	± 0.9	0.5
動機・目的の明確化	3.6	± 0.9	3.7	± 0.8	3.7	± 0.8	1.3
必要な情報の記載	3.8	± 0.9	3.8	± 0.8	3.8	± 0.8	0.2
わかりやすい経過の記載	3.0	± 0.9	3.2	± 0.9	3.2	± 0.9	1.3
結果に基づいた評価	3.0	± 0.9	3.1	± 0.8	3.1	± 0.8	1.6
目的に対応した考察	3.0	± 1.0	3.3	± 0.9	3.3	± 0.9	2.3*
要点のまとめ	2.9	± 0.9	3.1	± 1.0	3.1	± 1.0	1.9
今後の課題の明確化	3.1	± 1.0	3.2	± 1.0	3.2	± 1.0	0.9
スタディの計画的実施	2.5	± 1.1	3.0	± 1.1	3.0	± 1.1	3.0**
積極的に取り組む姿勢	3.4	± 1.0	3.8	± 0.8	3.8	± 0.8	2.8**
理論と事実の結びつきの理解	3.3	± 0.9	3.5	± 0.8	3.5	± 0.8	1.6
合計	38.6	± 6.9	41.2	± 6.8	41.2	± 6.8	2.6**

* p < 0.05, ** p < 0.01

(2)経験回数による評価項目別平均得点の比較

ケース・スタディは内科系実習と外科系実習で1回づつ経験するため、経験回数として全学生が2回経験する。評価項目別平均得点を1回目と2回目で比較したところ、教官評価においては経験回数による有意差は認められなかった。学生評価（表8）においては、すべての項目において1回目より2回目の方が平均点が高く、「テーマの主體的選択」「目的に対応した考察」で $p < 0.05$ 、「スタディの計画的実施」「積極的に取り組む姿勢」で $p < 0.01$ の有意差がみられた。

3. ケース・スタディを行って学んだこと

評価用紙に記述された「学んだこと」を分類したところ7項目に整理された（表9）。

最も記述が多かった項目は【具体的な援助の展開について学ぶことができた】166件で、

記述内容としては「患者の不安とその援助方法について学ぶことができた」50件、「効果的な患者指導について学ぶことができた」41件、「安楽の変調のある患者への援助について学ぶことができた」26件などがあげられていた。二番目に多かった項目は【自分の行った援助を振り返ることの重要性を学んだ】79件で、記述内容には「自分の行動の意味や傾向を知り自己発見につながった」とするものも19件あった。次いで多かった項目は【対象を尊重し、個別性をふまえて援助することの大切さを学んだ】63件で、内容としては「患者の個別性、全体像をとらえることができた」20件、「対象の気持ちを考慮して援助することが大切である」17件などがあつた。

記述数を経験回数によってみると、【自分の援助を振り返ることの重要性】【観察、アセスメントの重要性】の記載は初回の方が多く、

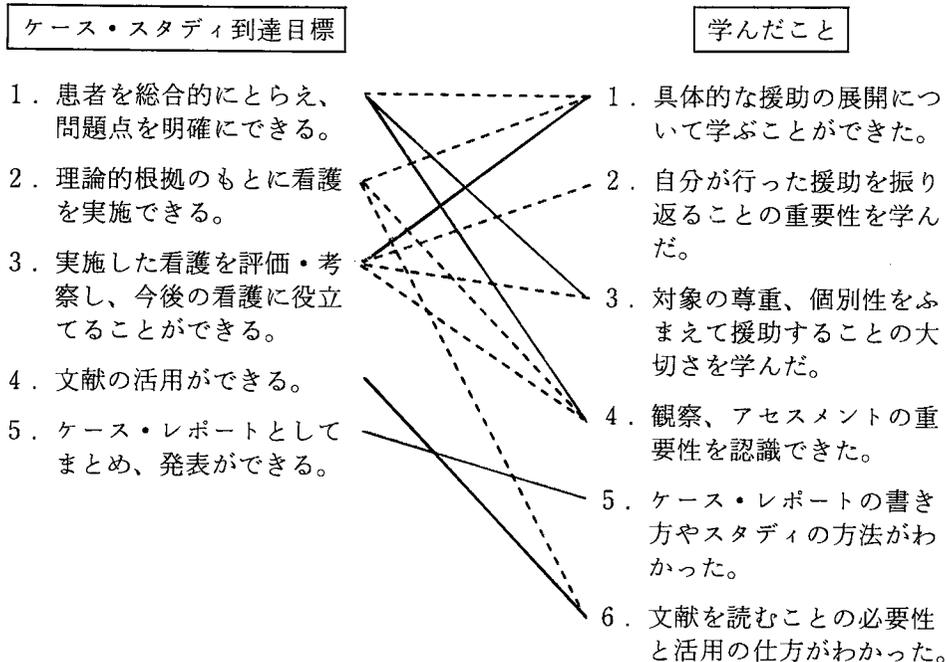


図1 到達目標に対応する「学んだこと」の内容

【具体的な援助の展開】【対象尊重、個別性をふまえた援助の大切さ】は2回目の方が記述数が多い傾向がみられた。

学んだことの種類結果をケース・スタディの到達目標に対応させたものが図1である。明らかに対応していると考えられる項目間を実線で結び、文章上での対応は明らかではないが、意味的に対応している部分を含むと考えられる項目間を点線で結んだ。目標2に対しては明らかに対応する項目はなかったが、目標1, 3, 4, 5に対しては、対応する学びが記述されていた。

4. ケース・スタディを行って困ったこと

「ケース・スタディを行って困ったこと・大変だったこと」の記述内容は、表10に示すようにテーマの選定、実施、評価、考察、文献、構成と表現などの8項目に分類することができた。最も記述が多かった項目は【ケー

ス・レポートをまとめる際に構成および表現に困った】110件であり、中でも「適切な語句を用いてわかりやすく文章に表現することが難しかった」51件、「看護の実際をどう表現すればよいか悩んだ」37件などが多数を占めていた。次に記述が多かった項目は【実習期間内に計画的にケース・スタディを行うことが大変だった】55件であり、日々の援助と平行してケース・スタディに取り組むことに対し負担を感じている記述内容が多くみられた。

【考察を書くのに苦労した】41件の具体的な内容で多かったのは「考察がうまくまとめられなかった」28件で、記述例としては『掘り下げて考えることができず苦労した』などがあつた。13件と少ないが「考察の書き方がよくわからなかった」とするものもあつた。また、【テーマがなかなかしぼれず選定に時間がかかった】との記述も42件あつた。

表9 「学んだこと」の記述内容

有効回答者数=102(重複回答)

記述内容	経験回数別の記述数		
	1回目	2回目	合計
1. 具体的な援助の展開について学ぶことができた。	69	97	166
1)患者の不安とその援助方法について学ぶことができた。	22	28	50
・患者の不安や不安に影響する要因について理解できた。			
・不安表出にも個性があり、表出されない不安を察することも大切である。			
・不安の種々の原因・要因に対する具体的な援助方法を学んだ。			
・精神的援助(不安軽減)の重要性と難しさを学んだ。			
・訴えを聴くこと、側にいることも不安軽減につながる。			
2)効果的な患者指導(教育)について学ぶことができた。	11	30	41
・わかりやすく受け入れやすい指導方法の必要性と具体例を学んだ。			
・個人の背景や生活習慣をふまえた個性のある指導が重要である。			
・家族や周囲に対しても、理解と協力が得られる指導が大切である。			
・その他			
3)安楽の褒調のある患者への援助について学ぶことができた。	11	15	26
・苦痛の具体的な緩和方法が理解できた。			
・苦痛に関連する要因についてもアセスメントし援助する。			
・患者が感じている苦痛を理解することの難しさと大切さを知った。			
・苦痛緩和の援助の重要性を再認識した。			
4)早期離床・リハビリテーションにおける看護について学ぶことができた。	8	12	20
・リハビリテーションに対する意欲を高める援助の必要性と方法がわかった。			
・ADLや障害の程度を適切に評価して援助する必要性を学んだ。			
・早期離床、リハビリテーションの重要性・難しさと援助方法を学んだ。			
5)自分の援助の具体的な反省点・改善点に気付くことができた。	17	12	29
2. 自分が行った援助を振り返ることの重要性を学んだ。	44	35	79
1)自分が行った援助を振り返ることの重要性がわかった。	21	12	33
2)自分の行動の意味や傾向を知り自己発見につながった。	7	12	19
3)ケース・スタディを行うことの意義・目的を学んだ。	10	5	15
4)今後の看護・自己の課題について考えることができた。	6	6	12
3. 対象を尊重し、個性をふまえて援助することの大切さを学んだ。	28	35	63
1)患者の個性、全体像をとらえることができた。	8	12	20
2)対象の気持ちを考慮して援助することが大切である。	10	7	17
3)コミュニケーション、人間関係の重要性と方法を学んだ。	6	10	16
4)個人に合ったレベル、ペースで援助することが大切である。	4	6	10
4. 観察、アセスメントの重要性を認識できた。	16	13	39
1)アセスメントの重要性が再認識できた。	8	1	9
2)援助の目的・目標を明確にして看護することの重要性を学んだ。	3	4	7
3)観察の重要性が再認識できた。	3	4	7
4)合併症予防のための援助は先を予測した看護が重要である。	2	4	6
5. ケース・レポートの書き方やスタディの方法がわかった。	8	8	16
6. 文献を読むことの必要性和活用の仕方がわかった。	7	3	10
7. その他	12	12	24

表10 「困ったこと」の記述内容

有効回答者数=102 (重複回答)

記述内容	経験回数別の記述数		
	1回目	2回目	合計
1. テーマがなかなかしぼれず選定に時間がかかった	14	15	29
2. 実習期間内に計画的にケース・スタディを行うことが大変だった	27	28	55
・日々の援助を行いながらであったため大変だった	8	11	10
・時間的に余裕がなく実習期間内にまとめることが大変だった	8	12	20
・計画が不十分であったため十分な検討ができなかった	11	5	16
3. 患者の状態に応じて援助の計画を変更し実施することが難しかった	17	12	29
4. 目標設定が客観的・具体的でなかったため評価に困った	10	15	25
5. 考察を書くのに苦労した	25	16	41
・考察がうまくまとめられなかった	19	9	28
・考察の書き方がよくわからなかった	6	7	13
6. 文献検索・文献活用が難しかった	11	16	27
・文献を探すのに苦労した	6	13	19
・文献を適切に活用できなかった	5	3	8
7. ケース・レポートをまとめる際に構成および表現に困った	58	52	110
・適切な語句を用いてわかりやすく文章に表現することが難しかった	34	17	51
・看護の実際をどう表現すればよいか悩んだ	14	23	37
・限られた枚数の中でわかりやすくまとめるために全体の構成の工夫に苦慮した	5	7	12
・一貫性をもってまとまりのあるものにすることが難しかった	4	4	8
・テーマの表現に悩んだ	1	1	2
8. その他	6	4	10

1回目と2回目で「困ったこと」の記述数に変化がみられたのは【目標設定が客観的・具体的でなかったため評価に困った】【文献検索・文献活用が難しかった】で増加し、【患者の状態に応じて援助計画を変更し実施することが難しかった】【考察を書くのに苦労した】で減少傾向がみられた。

考察

1. テーマの選定

テーマを分類した結果をみると、内科系実習では「教育評価」「ADLの拡大」が多く、外科系実習では「安楽の変調」や「気道クリアランス」が多いことから、内科的療法を受ける患者の看護、手術療法を受ける患者の看護というそれぞれの特徴をふまえたテーマが

選択されていると評価でき、実習効果をあげるといふケース・スタディの目的にかなっていると考えられる。

テーマ選定についてみると、疾患によってテーマがある程度限定される傾向も一部にみられた。また、臨床実習で学生が受け持つケースは1～2例と少なく、そのケースの看護問題の中からテーマを選ぶことが多いためにテーマ選定の幅は狭くなっている。「困っていること」の記述にもあるように、そのような状況の中で学生がテーマの選定に苦慮していることがうかがわれる。しかし、テーマを決める段階の思考プロセスは重要であり、教官は学生自身がケースの最も問題になっていることは何かを考えられるように働きかけている。その結果として、学生はテーマの選択に

時間がかかるという困惑をもちながらも、主体的にテーマの選択ができたと評価していると考えられる。

2. ケース・スタディの評価項目別達成度

(1) 教官評価および学生評価

ケース・スタディの評価表における教官評価の平均値は、すべての項目が3点以上であることから、ケース・スタディの目標はある程度達成されていると考えられる。

教官評価の得点が高かったのは「テーマの主体的選択」「動機・目的の明確化」「必要な情報の記載」であった。動機や目的はスタディの計画書を作成する段階である程度明確にできていること、情報の記載についてはケース・スタディの手引きに必要な情報の具体例を示していることから達成されやすいのではないかと考えられる。一方、得点が低かった「要点のまとめ」「今後の課題の明確化」については、学生が『まとめ』『おわりに』で何を明らかにするかを十分に理解できないままにレポートをまとめていること、『評価』『考察』の指導にウエイトがおかれ、教官側の指導が不十分になっていることが考えられる。また、「スタディの計画的実施」の得点が低いのは、日々の援助を行いながら取り組むために、スタディを計画通りにすすめられなかったり、提出期限を守れなかったりしているためである。

学生評価における得点の高い項目、低い項目は教官評価と一致していた。学生評価では、他に「わかりやすい経過の記載」と「結果にもとづいた評価」の得点が低かった。経過をまとめる過程で多くの修正を加え苦労したことや自分の行った看護を客観的に評価することの難しさが得点の低さに影響していると考えられる。また、困ったこととして、「看護目標の設定が客観的・具体的でなかったため評

価に困った」などが多く記述されていることから、日々の実習展開の中でも看護目標を具体的に設定するように、さらに指導していくことが必要と考えられる。

(2) 経験回数による達成度

教官評価においては、経験回数による得点の有意差がみられた項目はないが、1回目と2回目では担当教官が異なるため、評価基準の標準化をはかるなどして今後さらに検討を重ねる必要がある。

学生評価において2回目が有意に高かった4項目についてみると、「テーマの主体的選択」「スタディの計画的実施」「積極的に取り組む姿勢」については、スタディの進め方がわかっているため早めに計画を立て、積極的に取り組めたのではないかと思われる。また、「目的に対応した考察」については初回から繰り返し指導しているが、多くの学生は自分の考えを文章に表現する段階で苦労しており、思うように深められていない。しかし、2回目では自分の考えを表現する過程にも慣れ、本来の視点で考察を深められるようになってきているのではないかと考えられる。合計得点についても有意差がみられたことから、スタディの達成度は経験を重ねることによって高まっていると思われる。

3. ケース・スタディによる学びの内容

学びの内容を分類した結果は、程度には差があるもののケース・スタディの到達目標をほぼ網羅するものであった。目標2については直接的に対応する項目はなかったが、アセスメントや援助方法の学びの中で、理論的根拠の重要性を学んでいるのではないかと考えられた。学んだことの内容として最も記述が多かった項目は具体的な援助方法に関するものであり、「不安への援助」「患者指導」「安楽の変調への援助」など、成人看護実習で学ん

でほしい看護の特徴が深められており、ケース・スタディを行うことの有用性が確認された。

また、ケース・スタディを実際に行うことにより、看護過程のそれぞれの段階での学びを深めているのみでなく、自分の行った援助を振り返ることの重要性を多くの学生が学んでいる。自分が行った援助を振り返る姿勢を養うことは基礎教育の一つの課題でもある。ケース・スタディを行うことによって、自分が行った援助過程を整理し評価することの意味を学生が実感できたことは、そうした態度を育てていくうえでも意義があるといえよう。

まとめ

ケース・スタディの実施状況および達成度を分析することにより、以下の点が明らかになった。

1. 内科的、外科的療法を受ける患者の看護について、それぞれの特徴をふまえたテーマが選択されていた。
2. 学生はテーマの選択に時間がかかるという困惑をもちながらも、主体的にテーマの選択ができたと評価していた。
3. 評価項目別平均得点はすべて3点を超え、目標はほぼ達成されていたが、「要点のまとめ」、「今後の課題の明確化」、「スタディの計画的な実施」の項目得点は低い傾向にあった。
4. 学生評価において2回目の得点が有意に高かった項目は、「テーマの主体的選択」「目的に対応した考察」「スタディの計画的実施」「積極的に取り組む姿勢」であった。ケース・スタディの達成度は経験回数によって高くなっていた。
5. 「学んだこと」の内容分類では、ケース・

スタディの目標にそった学びができていた。

おわりに

ケース・スタディの教育効果について検討した結果、成人看護実習においてケース・スタディを行うことは教育上効果があることが確認された。しかしながら、実習期間内に行うことにより、時間的な余裕がないことも事実であり、ケース・スタディの展開方法や指導方法についてさらに検討していきたい。

文献

- 1) 出口昌子他：看護基礎教育課程における看護研究の検討—改正カリキュラムでの実施状況と問題点—, 日本看護学教育学会誌, 4 (2), 31-32, 1994.
- 2) 小松玲子, 大沢文子, 白石英美：当短大学生のケース・スタディの動向—テーマとケースの背景—, 日本赤十字武蔵野女子短期大学紀要, 3 : 66-75, 1990.
- 3) 大沢文子, 白石英美, 小松玲子：当短大学生の「研究：ケース・スタディ」の現状と今後の課題—当短大学生のケース・スタディに取り組む姿勢から—, 日本赤十字武蔵野女子短期大学紀要, 3 : 55-65, 1990.
- 4) 森田チエコ他：学生の「研究」の現状と課題 (第2報)—事例研究テーマの分類と動向 (第1看護学科)—, 神戸市立看護短期大学紀要, 7 : 95-112, 1988.
- 5) 車サトエ他：研究テーマと評価の分析からみた学生の事例研究の成果と課題, 第19回日本看護学会 (看護教育) 集録, 148-151, 1988.

受付日：1995年10月3日

受理日：1995年11月21日